

科目【国語，数学】

〔各100点
50分〕

出題科目	ページ	解答できる科目		備 考
		総合情報学部	看護学部	
国 語	(2) ～ (25)	○	○	
数 学	2 ～ 5	○	○	

◎「総合情報学部」および「看護学部」の受験者に共通する注意事項

<注意事項>

- 1 「国語」および「数学」の2科目のうち、いずれか1科目を選択し解答してください。
- 2 解答用紙に受験番号、氏名、フリガナを正しく記入してください。また、受験番号のマーク欄にも必ずマークしてください。
- 3 解答用紙の解答科目欄には、選択する科目を必ずマークしてください。解答科目欄が無マーク、または複数マークの場合、0点となります。
- 4 解答用紙の解答欄は、「国語」と「数学」とで異なっており、色分けして表記されています。解答科目欄にマークした後、矢印に沿って解答欄を確認してください。
- 5 解答には、必ず黒鉛筆（H、F、HBに限る）およびプラスチック製消しゴムを使用してください。
- 6 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁や乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、挙手の上、試験監督者に申し出てください。
- 7 問題冊子の余白等は適宜利用して良いですが、どのページも切り離さないでください。
- 8 不正行為に対しては厳正に対処します。不正行為に見えるような行為が見受けられた場合は、監督者が注意します。なお、不正行為を行った場合は、その時点で受験を取りやめさせ退室させます。
- 9 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ってください。

裏面（B面）にも注意事項がありますので、必ず読んでください。

＜注意事項＞

解答用紙にマークする際は、下の記入例にならっておこなってください。

- ◆「国語」については、設問ごとに解答番号（

1

2

3

 …）
が示されているので、解答は下の＜記入例＞にならってそれに対応する解答番号
にマークします。

〈記入例〉

設問 1

問 1

1	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- ◆「数学」については、問題文中の

ア

 ,

イ

 …などの

--

 内の
カタカナの文字一つ一つには、それぞれ 0～9 の数字のいずれか一つが対応しま
す。したがって、解答は下の《記入例》にならって、あてはまる数字をア、イ、ウ
…で示された解答欄にマークしてください。

解答が分数になるときは、必ず既約分数で答えてください。約分可能な答えは不正解とします。

《記入例》

I

ア	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

表面（A面）にも注意事項がありますので、必ず読んでください。

数 学

(解答番号 ア ～ ラ)

I 次の各問いに答えよ。

問1 $3x^2 + 2x - 8 = (3x - \boxed{\text{ア}})(x + \boxed{\text{イ}})$

問2 2次方程式 $x^2 - 5x + 6 = 0$ の解は,
 $x = \boxed{\text{ウ}}, \boxed{\text{エ}}$ である (ただし, $\boxed{\text{ウ}} < \boxed{\text{エ}}$)。

問3 赤玉3個と白玉2個が入った袋から同時に2個の玉を取り出すとき, 取り出された玉が同色となる確率は $\frac{\boxed{\text{オ}}}{\boxed{\text{カ}}}$ である。

問4 0～9の10個の数字から異なる3個の数字を使って3桁の整数を作るとき, 作り方は $\boxed{\text{キ}}\boxed{\text{ク}}\boxed{\text{ケ}}$ 通りである。

問5 $\sin \theta = \frac{3}{5}$ のとき, $\tan \theta = \frac{\boxed{\text{コ}}}{\boxed{\text{サ}}}$ である (ただし, $0^\circ \leq \theta \leq 90^\circ$)。

問6 $45n$ が整数の2乗となるような最小の自然数 n は $\boxed{\text{シ}}$ である。

Ⅱ 次の各問いに答えよ。

問1 2次関数 $y = x^2 - 6x + 5$ の最小値は $-\boxed{\text{ス}}$ である。また、この関数のグラフと x 軸の共有点は $\boxed{\text{セ}}$ 個である。

問2 2個のサイコロを同時に投げる。出た目の数の和が素数となる確率は $\frac{\boxed{\text{ソ}}}{\boxed{\text{タ}}\boxed{\text{チ}}}$ である。

問3 それぞれ色が異なる7個のビーズで首飾りを作るとき、作り方は全部で $\boxed{\text{ツ}}\boxed{\text{テ}}\boxed{\text{ト}}$ 通りである。ただし、回転させたり、裏返したりして同じになるものは区別しない。

問4 直角三角形 ABC において、 $\angle BCA = 90^\circ$ ， $AC = 8$ ， $BC = 15$ のとき、 $\sin \angle CAB = \frac{\boxed{\text{ナ}}\boxed{\text{ニ}}}{\boxed{\text{ヌ}}\boxed{\text{ネ}}}$ である。

Ⅲ a, b, c は定数とする。 $y = f(x)$ のグラフが点 A (1, 3), B (2, 5), C (-1, 3) を通る関数 $f(x) = ax^2 + bx + c$ について、次の各問いに答えよ。

問1 $a = \frac{\boxed{\text{ノ}}}{\boxed{\text{ハ}}}$, $b = \boxed{\text{ヒ}}$, $c = \frac{\boxed{\text{フ}}}{\boxed{\text{ヘ}}}$ である。

問2 $g(x) = f(x+1) + t$ とおく。すべての実数 x に対して、 $g(x) \geq 0$ が成り立つような t の値の範囲は、 $t \geq -\frac{\boxed{\text{ホ}}}{\boxed{\text{マ}}}$ である。

問3 方程式 $ax^2 + (b-2)x + (c-k) = 0$ が重解をもつような定数 k の値は、 $\frac{\boxed{\text{ミ}}}{\boxed{\text{ム}}}$ である。

- Ⅳ 以下の度数分布表について、次の各問いに答えよ。なお、平均値・分散は階級値を用いて考えるものとする。

階級	10以上20未満	20以上30未満	30以上40未満	40以上50未満	50以上60未満
度数	3	5	a	5	3

- 問1 このデータの平均値は である。
- 問2 このデータの分散が 136 であるとき、 a の値は である。
- 問3 a の値が問2 のとき、各階級値をその度数の回数だけ並べたデータを考える。
例えば、度数分布表において、10以上20未満の度数は3であるから、この階級値15を3回並べる。こうして作ったデータをXとする。

$Y = \frac{X - 35}{2}$ とおくとき、Yの平均値は , 分散は である。

I 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

アートから作られる英語の形容詞に、⁽¹⁾「アーティフィシャル」と「アーティスティック」がある。「アーティフィシャル」には、自然にできたのではなく人間が作ったという単純な意味もあり、「AI」における「アーティフィシャル」とはそうした中立的な意味である。一方日常会話において「アーティフィシャル」という形容詞が使われると、中立的な意味の他にしばしば「ツクリモノの」「わざとらしい」といった意味を持ち、どちらかというときあまり好ましいニュアンスの言葉とは言えない。それに対して「アーティスティック」の方は「絵^えどころがある」とか「芸術的な」「技の冴^さえた」「趣のある」など、概ねポジティブな意味で用いられることが多い。両方とも同じ技術^{アート}という語を元にした言葉でありながら、この違いはいつたどこから生じるのだろうか？

美学の古典的文⁽¹⁾ケンとされる^(注)イマヌエル・カントの『判断力批判』という本では、この技術^{アート}という概念が、学問的知識や「自然」との関係において、広い哲学的な視野において議論され、規定されている。もともと原文はドイツ語で書かれているので、アートではなく「クンスト (kunst)」という語なのであるが、今はあんまりこだわらないことにする。本書では哲学史の解説をすることが目的ではないので、技術についてのカントの考察の中から、私たちがAIについて哲学的に考えるために重要と思われる部分だけを、いくぶん単純化してしまふことを覚悟で抜き出しながら紹介してみよう。

技術は、「自然」から区別される。それは、「行為」が「作用」とは異なり、「作品 (行為の産物)」がたんなる作用の結果とは異なるということだと、カントは述べる。この箇所を読む上でまず注意すべきことは、「自然」という言葉の持つ含意である。というのも「自然」という概念の意味は過去二世紀という時間の間に大きく変わっており、この変化がしばしば西洋の古典的な哲学テキストを読む時に邪魔になるからである。【a】私たち現代人にとって、「自然」は過剰に美化

されている。自然は現代人にとって好ましいもの、だが弱いもの、文明化の脅威に晒され、破壊から護るべき貴重なリソース、といった含意を持っている。「母なる自然」、帰るべき故キヨウといったイメージも持っている。だが自然のそうした意味は主としてカントの時代に続く一九世紀、ロマン主義以降の文化の中で作られたものである。それは同時に、産業革命が急速に進行し、人間生活が人工物に取り囲まれる環境へと変貌してゆく時代でもあった。現代の私たちの文化も依然としてその影響下にある。

しかしカントにとって自然とは、そうした X ではない。自然とはむしろ、物理法則に従ってひたすら作動する、巨大なメカニズムなのである。物理法則は、私たちが経験する世界の全体に及んでいるから、文明に対立する自然ばかりではなく、文明や人工物自体も、カント的な意味ではすべて自然の支配下にある。言い換えればそこには、現代の私たちが常識としているような、自然と人工との対立というものはない。それを踏まえた上で、もしもカントが「人工知能」を知ったかどうかと想像してみるの面白いだろう。現代人は「機械が心を持つか」といった問いに惹きつけられるが、おそらくカントにとってこの問いはまったく意味を持たないのではないか。機械であるかぎりにおいて——電子回路であろうが生きた神経細胞であろうが——心を持たないのは、定義上自明だからである。情報処理の複雑さがある閾値を超えると自己意識や感情を持つようになるというような現代的空想は、一種のオカルトではないかとカントなら疑ったのではないだろうか。

もちろんカント哲学においても、自然と人為の間には区別がある。自然は意図を持たないが、人間の行為は意図や欲求を持つからである。【b】ここで欲求というのは欲望や衝動といった狭い意味ではなく、「こうすべきだ」という道徳的な欲求をも含んだ広い意味である。そうした欲求を持ちうるものが、人間が「自由」であるといふことの意味である。したがってカントにおいては、Y。この違いは、初めて耳にする人にとってはピンと来ないかもしれないが、AIについて哲学的に考える際にいちばん重要なポイントなので、何とか心に留めておいてほしいことである。現代の私たちにとっては、人工物としての機械が自然と対立する。けれどもカントにおいては自然が機械であって、自然物であれ人工

物であれ機械的に動く世界が、意図や欲求によって動く自由の世界と対立しているのである。

右でカント哲学の基本を紹介したのは、そこで考えられている技術とは何かということを正確に理解するためであった。自然と自由とは対立するけれども、自然と技術とは単純に対立しているわけではない。【c】ではそれらはどんな関係にあるのだろうか？ この、自然と技術との関係こそ、私たちがテクノロジーについて考察する際、AIとは私たちにとって何なのか、どのように向きあうべきかを考える上で、もっとも重要なことだと思うのである。

一般に技術とは、何らかの目的を達成するための手段である。そして、その目的とは、技術それ自体の外にある。靴を作る技術は、それを履いて快適に歩くという目的のために行使されるが、この目的は靴を作る技術それ自体と必然的に結びついているわけではない。革を加工したりする同じ技術は、靴を作って履くというのとはまったく異なった目的のためにも使われるからである。そうした、外部にある特定の目的のために行使されるというのが、技術のふつうの理解だろう。【d】それは、技術の目的が技術の外にあるのではなく、自分自身の中にあるような技術、いわば外の助けを借りずに自力で目的に適^{かな}っているような技術である。そうした、技術がそれ自身の目的に適っているような技術のことを「美しい技術^{フュイン・アート}」、つまり「芸術」と呼ぶのである。これもまた、現代人の多くにとっては、芸術についての異様な定義だと思われるかもしれない。だがここで、本章の冒頭で引用した太宰治の作品の一節を思い出してほしい。鉄道の陸橋や地下鉄のような技術的産物を、主人公はオサナイ頃、何かの役に立つためではなく、それがあること自体が楽しいから作られたのだと信じていた。それはつまりテクノロジーを「芸術」だと思っていたということなのである。

いよいよ核心に近づいてきた。技術一般は——それが外部に目的を持つという点において——自然と区別されるにもかかわらず、「美しい技術」つまり芸術は「同時に自然にみえる」ような技術であると、カントは述べているのである。もちろん芸術作品だって、それが人為的な制作過程によって生み出されたことを私たちは知っている。【e】だが同時に私たちは芸術について、まるで作者は自由奔放に作っただけのようにみえる、などと言わないだろうか。そうした言い方の

背後には、芸術において技術は機械的強制力として現れてはならず、あたかも自然の産物のように、作為なく勝手に出来上がったようにみえなければならないという認識がある。つまり技術と自然との間には、相互に⁽⁴⁾テらし合う二重の関係が存在するように思えるのである。技術は、一方では特定の目的に沿ったものを制作するために機械的強制力を用いる活動なのだが、他方ではいわば自由な遊びとして、あたかも自然であるかのように現れることもある。技術は⁽⁵⁾そうした二面性において考えられなければならないということである。

このことを先に触れた二つの英語形容詞に結びつけてみると、「アーティフィシャル」における技術^{アート}とは自然との対立において理解された技術であり、それに対して「アーティスティック」における技術^{アート}とは、技術でありながら作為が感じられない技術、「あたかも自然として」現れる技術として理解できる。

(吉岡洋『AIを美学する なぜ人工知能は「不気味」なのか』より)

(注1) イマヌエル・カント―プロイセン王国の哲学者(一七二四―一八〇四)。

(注2) 本章の冒頭で引用した――筆者は本文が書かれている章の冒頭で、太宰治の『人間失格』の一部を引用し、その主人公が子どものとき、「停車場のブリッジ」や「地下鉄道」を「遊戯」や「遊び」のためのものだと思っていたというエピソードを紹介している。

※問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えています。

問一 傍線部(1)～(4)のカタカナの部分と同じ漢字を用いるものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

1 (1) 文ケン

- ① 先ケン隊が到着する
- ② 宝石をケン磨する
- ③ 政治ケン金
- ④ 昼夜ケン行
- ⑤ ケン疑をかける

2 (2) 故キヨウ

- ① 度キヨウをすえる
- ② キヨウ合する他社
- ③ キヨウ楽的な生活
- ④ 桃源キヨウ
- ⑤ 物価がキヨウ乱する

3 (3) オサナい

- ① ヨウ動作戦
- ② 候補者をヨウ立する
- ③ ヨウ子縁組
- ④ 長ヨウの序を守る
- ⑤ 中ヨウの精神

4 (4) テらし

- ① 中シヨウを受ける
- ② 臨シヨウ実験
- ③ シヨウ準を定める
- ④ 減価シヨウ却
- ⑤ 身元を保シヨウする

問二 傍線部(ア)『アーティフィシャル』と『アーティスティック』とあるが、筆者はこれらの言葉についてどのような

に考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

5

- ① 両者はともに技術を問題にしたカントの用語であるが、前者においては特に、物理法則に支配された中立的な技術が問題となり、後者においては特に、人間の意図や欲求によって実現される自由な技術が問題となるという違いがある。
- ② 両者はともに技術を意味する英語のアートから派生した言葉であるが、前者はカントの考える「自然」と対立する合目的な技術を意味するのに対して、後者は私たちがイメージする自然と対立する無目的な技術を意味する。
- ③ 両者はともに技術に関係する言葉であるが、前者において想定されている技術は、ロマン主義的なイメージを持ったものであるのに対して、後者において想定されている技術は、特定の目的に対する機械的強制力を持った技術である。
- ④ 両者はともに技術にかかわる言葉であるが、前者の意味において問題となる技術とは、自然と対立する人為的なものであり、後者の意味において問題になる技術とは、あたかも自然であるかのように現れる、「芸術」のようなものである。
- ⑤ 両者はともに技術のあり方を表す言葉であるが、前者がいかに人間が作ったことを感じさせる前近代的な技術のあり方を表す言葉であるのに対して、後者はそう感じさせることのない現代的な技術のあり方を表す言葉である。

問三 次の文が入るべきところは、本文中の【a】～【e】のうちのどれか。最も適当な箇所を、後の①～⑤の中から一つ選べ。

けれどもカントは、そうではない技術も存在すると言う。

6

- ① 【a】 ② 【b】 ③ 【c】 ④ 【d】 ⑤ 【e】

問四 空欄 X に入る表現として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

7

- ① 機械的に動く文明的存在
② ロマンチックな憧れの対象
③ 生活の中にある人工物
④ 古典的な意味での「自然」
⑤ 私たちの生活を取り囲む環境

問五 傍線部（イ）「おそらくカントにとつてこの問いはまったく意味を持たないのではないか」とあるが、筆者がそのよ

うに考えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

8

- ① 「人工知能」もまた機械であるというかぎりでは物理法則に支配されており、そのような意味で「自然」である機械が心を持つことなど、最初からあり得ないとカントならば考えるに違いないから。
- ② カントが想定する「自然」とはロマン主義以降のそれであり、物理法則の支配下にあるものという意味であるため、「人工知能」が心を持つかどうかについて人間が議論しても無駄ということになるから。
- ③ 「機械が心を持つか」という問いは、現代においてこそ意味をなすのであって、カントが生きた時代には「人工知能」という概念すらなく、それについて論じることもあり得ないから。
- ④ 私たちが経験する世界はすべて「自然」であるというカントの考えにしがえれば、「人工知能」も「自然」であり、人間と同じような心を持つようになって、それも「自然」ということになるから。
- ⑤ カントによれば、人工物も自然物と同じように物理法則に従っているという意味では「自然」にほかならず、それならば、「人工知能」という言葉そのものが成り立たないということになるから。

問六 空欄 Y に入る表現として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

9

- ① 自然物は自由であるのに対して、機械は自由ではない
- ② 自然と人為との間に対立はないが、自然と機械は対立する
- ③ 人工物と自然物は対立するが、人為と自然は対立しない
- ④ 機械と自然は対立し、機械と人間もやはり対立する
- ⑤ 自然と人工の間に対立はなく、自然と自由との間にある

問七 傍線部(ウ)「その目的とは、技術それ自体の外にある」とあるが、筆者がそうのように考えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

10

- ① 技術は目的と必然的に対応しているわけではないため、予想外のものを生み出してしまうことがあるから。
- ② 何らかの目的があつてはじめて技術は生まれるものだが、その目的は時代とともに変化していくから。
- ③ 技術は必ず目的に適合するものでなければならないが、目的は技術に適合するものでなくても構わないから。
- ④ 技術によって達成される目的はあるが、その目的のためだけに技術が存在しているわけではないから。
- ⑤ 最初は特定の目的を達成するための手段として生まれた技術も、他の分野に転用される可能性があるから。

問八 傍線部（エ）「そうした二面性」とは、具体的にどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

11

- ① 目的を外部にではなく自身の内部に藏している、芸術のような「美しい技術」は、「同時に自然にみえる」無作為なものでもあるという二面性。
- ② 技術は、一方では目的に対する機械的強制力を持ったものとして現れるが、また他方では作為の感じられない自然なものとしても現れるという二面性。
- ③ 自然と対立する「アーティフィシャル」な技術も、やがて、いかにも自然な「アーティスティック」な技術へと洗練されていくという二面性。
- ④ 機械的強制力を持ったものとして表れる技術も、潜在的には、自然に感じられる「アーティスティック」な技術になる可能性があるという二面性。
- ⑤ 一見すると機械的強制力を持ったいかにも人為的な技術であっても、実態は自然と融和的な「美しい技術」である場合もあるという二面性。

問九 本文の内容と合致しているものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

12

- ① カントの考える技術とは、「自由」な人間により実現されるものである。
- ② どのような目的を持つかによって、AIの存在意義は変わってくる。
- ③ 芸術は自然と不可分のものになってはじめて、真に「美しい技術」となる。
- ④ 技術とその目的の関係は、本来、必要十分なものでなければならない。
- ⑤ AIはカントの考える「自然」ではなく、したがって「自由」でもない。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

手仕事は、その土地の「風土」や「歴史」とも不可分の関係にあります。手仕事は不可⁽¹⁾ヒ的にその土地のちからの助けを必要とします。こういったほうがよいのかもしれませんが。手仕事を営む者は、その場所に潜^{おの}む可能性を自ずから強く求め、そして、自然に見出^{みいだ}すのです。

その土地の潜在可能性を語るとき^(注) 柳は、意識してなのか無意識なのか「色」という文字を印象的に用いています。

こんなにも様々な気候や風土を有^もつ国でありますから、植物だとして鳥獣だとして驚くほどの種類に恵まれます。人間の生活とても様々な変化を示し、各地の風俗や行事を見ますと、所に応じてどんなに異^{こと}なるかが見られます。用いている言葉だとて、それぞれに特色を示しております。これらのことはやがて各地で拵^{こしら}えられる品物が、種類において形において色において、様々な変化を示すことを語るであります。いわば地方色に彩^{いろ}られていないものとはありません。少^{すくな}くとも日本の本来のものは、それぞれに固有の姿を有^うって生^{うま}れました。

ものが生まれるときには、気候や風土などの「場のちから」が大きくそこに作用します。それを大きく利用していると^(ア)もいえる。しかし、現代人はそのことも分^わかりにくくなってきているのではないのでしょうか。設備さえあればどんなものも、どこでも作れると思^{おも}い込んでいるのかもしれない。

たしかに、それらしいものはどこでも作ることはできるでしょう。しかし「固有」なもの、生活の深部で私たちを支えているものは今日でも、その土地の「色」によって彩^{いろ}られています。

世のなかでよく売られている「民芸品」というのは、柳がいう「民^{みんげい}藝」とは似て X なるものです。「民芸品」のなかには量産された「粗末」なものも少なくありません。「民藝」であることの本質は、ある土地から生まれるべくし

て——つまり、必要に応じて——生まれてきたものであり、用いられることによってその美が磨かれるものだといえるかもしれません。「民藝」にふれるとは、広い意味での「自然」にふれることでもある、と柳は書いています。

自然からの驚くべき贈物おくりものでないものはありません。美しい材を用いるということは、やがて自然の美しさを讃たたえているに外ほかなりません。平たいちに削くったりあるいはそれを磨いたりすることは、要するに自然の有つ美しさを、いやが上にも冴さえさすためであります。自然を離れては、また自然に叛そむいては、どんなものも美しくはなり難いでしょう。一つの品物を作るということは、自然の恵みを記録しているようなものであります。

現代のわれわれは、何かものを作るというと、すぐに「自己表現」だという話になりがちです。

a

柳は「一つ

の品物を作るということは、自然の恵みを記録しているようなもの」だといいます。柳は自己表現を否定しているわけではありません。

b

、自己表現もまた、自然の恵みを離れては果たし得ないのではないかと問うのです。

c

生まれたものを見るとき、そこにどれだけ自己が表現されているかよりも、
②
に目を向けねばならないと視座の変化をウナガすのです。

d

、自然の力を受け止め得ているか

①
ものづくりをめぐる柳の文章を読んでいると、私のような文筆家は「書くこと」においてもあまりに深く共振、共鳴することに驚かされます。言葉を用いて表現をするときも、もっとも重要なのは自分勝手に言葉を用いることではなく、言葉の意味そのものをどれだけ豊かに開花させるかが問われているからです。

言葉は、意味の歴史の貯蔵庫です。そこに一個の人間の経験をはるかに超えたたちからが実在するのです。柳もまた、手仕事と「歴史」の関係を語るとき「言葉」のありように言及しています。

もし歴史が後に控くわえていなかったら、あの簡単に見える草履ぞうり一つだって作るのに難儀をするでありましょう。一枚の

紙だとして、どうして作るか、途方にくれるでありましょう。吾々の言葉だとして、なくなってしまうでありましょう。これを想うと、どんなものも歴史的なつながりを有って、存在していることが分ります。吾々の生活はどうしても歴史と縁を切ることが出来ません。

草履も言葉も歴史を離れてはあり得ない、と柳はいいいます。しかし、現代人は草履にも言葉にも歴史の支えがあることを忘れていたのかもしれませんが。そうした状況における手仕事は、現代において、歴史と私たちの関係を確かめ直す行為であり、見失ったつながりを再び見出そうとする試みだともいえそうです。

『手仕事の日本』には、日本各地における「手仕事」が紹介されています。紙幅が限られていますのでそのなかからいくつか、二二世紀を生きた私たちに強く訴える文章を引いてみたいと思います。東北における手仕事をめぐって柳は、
「実用に堪え得る」ものは同時に「実着」でもあるということです。

雪国の人たちは雪に堪える身形や持物を用意せねばなりません。それらのものは都からは運ばれて来ません。人々は色々のものを作って、自分やまた家族の者のために準備せねばなりません。しかもそれは実用に堪え得るように念入りに作ることを求めます。このことは手仕事を忙しくさせ、またその技を練えさせました。仕事に実着なものが多いのはこのためであります。

注目したのは「実着」という言葉です。ここでいう実着とは、堅実、着実であり、ゆるぎなく、また誠実であることも含意しているように思います。東北をめぐる章で柳は「純朴な実着」とも書いています。「実着」であることは、柳が考える「民藝」の必須要素の一つです。実着とは何かを経験しないと、実着な仕事を目の前にしてもその意味を見出す

のは困難です。それは単に月並みなものにしか見えないかもしれないからです。

実着なものとは、過酷な使用に耐えるものである。そして、どこかほかの場所から運ばれてきたものではなく、その土地から生まれたものであり、自分、あるいはその家族が日々の生活のために作ったものでもある、というのです。

民藝とは何かを学ぶのに民藝館に行くのもよいのですが、まず、生活感覚を見つめ直してみるのもよいかもしれません。自分の生活、さらにいえば人生における実着なものと向き合う。ここにもう一つの民藝への扉がありそうです。私がおすすめるのはやはり実着な言葉を用いることです。自分のなかにすでにある実着な一語と出会い直すこと、そこに実着な美への橋があるのです。先の一節に続けて、柳はこういいます。

しかし出来上^{あが}った品から見ますと、実は一番人々から粗末に扱われているいわゆる「粗物」と蔑まれているものが、最も特色のあるまた見事なものだと評さねばなりません。

なぜ「粗物」が、もともと特色のある、また見事なものになり得るのか。それは生活に深く根差し、確かに用いられるからです。そして、それらは、あったほうがいいものではなく、なくてはならないもの。美しく飾られたものではなく、本来に必要なものだからです。

民藝論の名著でもある『工藝の道』で柳は、「民藝」と対比するものとして「美藝」という言葉を用いています。美藝は飾られ、眺められるだけのものであっても構わない。しかし民藝は用いられなければならない。不要な装飾を除いた「粗物」であることが必然になる。⁽³⁾カ美なものではなく、長い実用に耐える強靱^{きようじん}さを備えたものでなくてはならない。民藝の美にはどこか、単なる量的な強さとは異なるもう一つの「つよさ」があるのです。

(若松英輔『柳宗悦 美は人間を救うのか(下)』より)

(注) 柳——柳宗悦。美術評論家、思想家（一八八九—一九六二）。民藝運動を主唱した。

※問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えています。

問一 傍線部(1)～(3)のカタカナの部分と同じ漢字を用いるものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

13 (1) 不可ヒ

- ① ヒ暑地に滞在する
- ② 写真のヒ写体
- ③ ヒ我の差を知る
- ④ 多額のヒ用がかかる
- ⑤ ヒ近な例

14 (2) ウナガす

- ① 鳥獣の生ソク域
- ② 不ソクの事態に備える
- ③ 仲間の結ソクが固い
- ④ 一ソク飛びに解決する
- ⑤ ソク音便

15 (3) カ美

- ① 繁カ街に出かける
- ② 図書館の書カ
- ③ 果物を出カする
- ④ カ占市場
- ⑤ カ幣価値が下がる

問二 傍線部（ア）「現代人はそのことも分かりにくくなってきた」とあるが、それはどういうことか。その説明とし

て最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

16

① 現代人は、設備さえあればいかなる場所でもものを作ることができると思い込んでいるようなところがあるので、その土地でしか作ることができない民芸品にも美しい品物があるということも、分からなくなりつつあるということ。

② 現代人は、設備さえあればどんなものでも作ることができると思込んでいるようなところがあるので、日本各地で手仕事によって作られた品物が高い価値をもっているということも、分からなくなりつつあるということ。

③ 現代人は、設備さえあればそれらしいものはどこでも作ることができると思込んでいるようなところがあるので、日本各地で作られる品物がその土地の特色を色濃く反映しているということも、分からなくなりつつあるということ。

④ 現代人は、設備さえあれば同じものを量産することができると考えているようなところがあるので、日本の各地には手仕事によって細々と作られている固有の品物があるということも、分からなくなりつつあるということ。

⑤ 現代人は、設備さえあればどこでも同じものを作ることができると思込んでいるようなところがあるので、設備を用いて品物を作る場合であっても、気候や風土が影響するということも、分からなくなりつつあるということ。

問三 空欄 X に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

17

- ① 比
② 非
③ 否
④ 批
⑤ 匪

問四 空欄 a d に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

18

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|-----|---|------|---|-----|
| ⑤ | a | たしかに | b | つまり | c | そして | d | むしろ |
| ④ | a | たしかに | b | ただ | c | もしくは | d | まず |
| ③ | a | しかし | b | つまり | c | そして | d | むしろ |
| ② | a | しかし | b | ただ | c | そして | d | まず |
| ① | a | しかし | b | つまり | c | そして | d | むしろ |

問五 傍線部（イ）「私のような文筆家は『書くこと』においてもあまりに深く共振、共鳴することに驚かされます」とあ

るが、筆者がそのように感じるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

19

- ① 柳は、ものづくりににおいて大切なのは自己表現ではなく、自然の恵みをそのまま生かすことだと述べたが、文筆家も言葉の意味を忠実に守らなくてはいけないから。
- ② 柳は、自然の恵みを離れてはものを作ることなどできないと言うが、文章を書くことにおいても、歴史的に蓄積された言葉の意味を離れては表現など成り立ちえないから。
- ③ 柳は、自己を表現するためには自然の恵みから離れてはならないと言うが、文筆家の仕事においても、自然に湧きおこる言葉があつてこそ自己表現は可能になるから。
- ④ 柳は、ものを作るときには自然の恵みを受け止めなくてはならないと述べたが、執筆活動においても、言葉に対しあえて受け身になることが必要になる場合があるから。
- ⑤ 柳は、自己表現を離れることではじめて、自然の恵みは記録できるようになると述べたが、文筆家の仕事にも、言葉そのものの意味を記録するという面があるから。

問六 傍線部（ウ）「『実用に堪え得る』ものは同時に『実着』でもある」とあるが、ここでの「実着」の内容に当てはまらないものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

20

- ① 観賞に向いている
- ② 日常的に使用される
- ③ 土着のものである
- ④ 「民藝」の条件となる
- ⑤ 手仕事によっている

問七 傍線部（エ）「『粗物』が、もっとも特色のある、また見事なものになり得る」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

21

- ① 「粗物」はその土地の生活に根差した必要不可欠なものであり、粗雑な扱いを受けたとしても、手仕事によって何度でも作られるものであるから。
- ② 「粗物」は生活の中で用いられ、雑な扱いを受けることもあるが、その土地になくってはならないものであり、言葉では表現できない価値を持っているから。
- ③ 「粗物」は美しく飾られるようなことはないものの、「民藝」としての価値を持っており、その意味では「美

「藝」と比べて遜色そんしよくがないものであるから。

④ 「粗物」は最も粗末に扱われる品物ではあるが、その土地に住む人々の手仕事によって生み出された、生活になくてはならないものであるから。

⑤ 「粗物」は日々の生活の中で用いられるものだが、柳の考える「民藝」としての条件を満たしているため、民藝館に展示されてもおかしくはないから。

問八 本文における筆者の主張として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

22

① 言葉とは歴史の貯蔵庫であり、そこには一人の人間の経験を超えた教えが詰まっているからこそ、文筆家は書くことにおいて言葉に深く共振、共鳴することになる。

② 「民芸品」と呼ばれるものには粗末なものも含まれているが、それが日々の生活における使用に耐え、人々の愛着の対象となれば、「民藝」と同等の価値を持つことになる。

③ 民藝は生活上の使用に耐えるものでなければならぬため、余計な装飾は省かれるが、そのような品物としての強さは、観賞の対象とは異なる美を生み出すことになる。

④ その土地の風土や歴史といったものを如実に映し出す品物は、地方色の豊かなものばかりであるから、その特性は「色」という言葉によってこそ適切に表現される。

⑤ 現代人は最初から自己表現を目的としてものを作るが、それでは真の意味での自己表現に到達することはできないため、まずはしっかりと技術を身につける必要がある。

Ⅲ 後の設問に答えよ。(各問において選択肢を重複して選ばないこと。)

問一 次の1～5の四字熟語の空欄に入る漢字として最も適当なものを、後の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

27	26	25	24	23
5	4	3	2	1
承転結	大 小用	色満面	雨 晴好	心 一転

- ① 機
② 器
③ 喜
④ 奇
⑤ 起

問二 次の1～5の熟語の意味として最も適当なものを、後の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

32	31	30	29	28
5	4	3	2	1
本懐	矜持 きやうじ	邂逅 かいこう	鷹揚	慇懃 いんきん

- ① 思いがけなく出会うこと
- ② 自分の能力を誇りに思うこと
- ③ かねてからの願いのこと
- ④ 丁寧で礼儀正しいこと
- ⑤ ゆったりとしていること

問三 次の1～5の小説家の作品を、後の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

33	1	正宗白鳥
34	2	徳田秋声
35	3	尾崎紅葉
36	4	田山花袋
37	5	島崎藤村

- ① 『新世帯』
- ② 『何処へ』
- ③ 『多情多恨』
- ④ 『田舎教師』
- ⑤ 『破戒』